

マサバ



生態的特徴等

【生態】

日本周辺に広く分布し、季節により大きく回遊する。太平洋側では春から夏にかけて伊豆諸島～常磐沖を北上し、秋に道東～三陸沿岸域を南下する。冬には2歳以下の未成魚は越冬場である常磐～房総海域で過ごし、3歳以上の成魚は産卵場である伊豆諸島周辺海域へと南下し3～6月に産卵する。稚魚は動物プランクトン、幼魚以降は魚類、甲殻類を主な餌とする。寿命は7～8歳。平成25年生まれの加入により資源量が大きく増加したが、密度効果によって成長速度の低下がみられている（図1）。

【漁法と盛期】

茨城県では主にまき網によって近縁種のゴマサバとともに漁獲されるが、漁獲量はマサバの方が多い。魚群の回遊に合わせて漁船も移動し、本県沖には晩秋から春に漁場が形成される。

【利用】

青魚の代表であるマサバは、EPA・DHAなどを豊富に含む。特に秋から冬は産卵のために栄養を蓄え、脂がたっぷりのっていて美味。鮮魚のほか、缶詰、塩干品原料として利用され、近年ではアジア・アフリカ等への輸出も盛んである。県のプライドフィッシュ（冬）に選定されている。

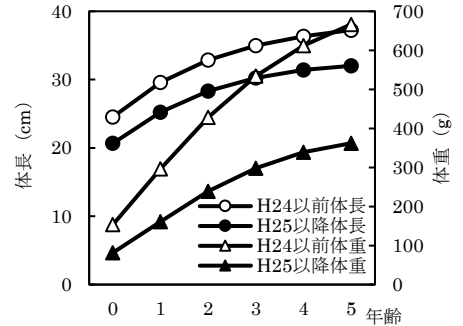


図1 マサバの成長

(H24以前に加入した年級とH25以降に加入した年級を別に示した)

資源は中位水準、漁獲量は不安定

(漁獲量) S53年には97万トンを超える漁獲があったが、その後急速に減少し、H3年には5千トンとなった。H15年に策定された資源回復計画により少しずつ安定し、H25年以降20万トン程度まで回復したが、その後減少しR4年は3万トンとなった（図2）。

(加入量) 約30年ぶりの大卓越とされるH25年級群の加入以降、資源量は増加し、その後も比較的高い加入が継続している。

(水準と動向) 国の資源評価（R5年度）によると資源水準は「目標管理基準値を下回る」、資源動向は「減少」とされている（図3）。

水準



(国)

動向



(国)

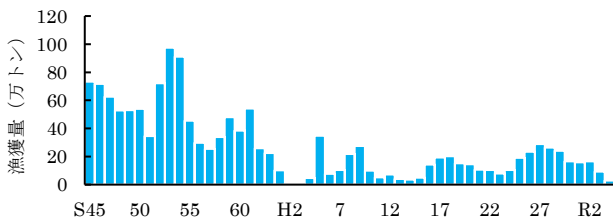


図2 マサバ漁獲量^{※1}の推移

※1 千葉県から青森県沖で操業する北部太平洋海区大中型まき網の漁獲量。年は漁期年（7月～翌年6月）を表す。

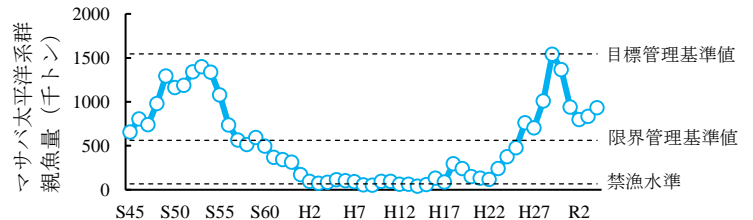


図3 マサバ太平洋系群の親魚量と管理基準値^{※2}

※2 新たな資源管理（MSY）に基づく管理基準値。

【全国の漁獲動向】

・茨城県は漁獲量全国2位。1位は長崎県、3位は宮城県。（R4農統）

評価期間：令和4年7月～令和5年6月 更新日：令和6年3月27日